

シノドスへの歩み みことばと共に

主の公現A年

小西広志

2023年1月8日

朗読箇所

第一朗読 イザヤ書 60章 1-6節

第二朗読 エフェソの信徒への手紙 3章 2-3、5-6節

福音朗読 マタイによる福音書 2章 1-12節

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。今日は2023年1月8日、主の公現をお祝いします。最初に少し「公現」についてお話ししましょう。

「公現」という言葉は、ギリシア語で神の顕れ（あらわれ）、顕現（けんげん）を表すエピファネイアに由来します。古代では立派な人の登場、例えば支配者の即位や都市の訪問の際にもこの言葉が使われたそうです。まさに、馬小屋に眠る幼子イエスこそが、この世に顕れた救い主に他ならないのです。

公現祭は4世紀の前半からエジプトで祝われていたといわれています。ちょうど、異教の祭儀が1月6日前後に執り行われていたことも公現祭が成立した背景にあるだろうと考えられています。主の洗礼、主の降誕、カナの婚礼といった主の秘義の数々を祝う祭りとしてエジプトで形成され、しだいに東方教会全体に広まっていったようです。4世紀末から5世紀にかけて西方教会にこの習慣は伝播していきました。しかし、そこでの公現祭はイエスさまの洗礼に加えて三博士の礼拝（マタイ2章1-12節）を諸国民への救いの訪れとして祝う形式へ変化していったようです。

あじわいのポイント

第一朗読は『イザヤ書』の60章からです。『イザヤ書』はその成立年代と著者によって、三つの部分に分かれます。通常、1-39章は第一イザヤ、40-55章は第二イザヤ、56-66章は第三イザヤと呼ばれています。今日の第一朗読は第三イザヤの箇所からです。第三イザヤの時代は、ちょうどバビロン捕囚から戻ってきたイスラエルの民は、苦しい生活にあっても神殿を再建した時代でもありました。しかし、捕囚の終わり頃に第二イザヤによって語られた神さまの栄光が現れない、それどころか飢饉や飢餓で苦しめられた、そんな時代でもありました。イスラエルの民の中に神さまへの信頼が薄らいでいったのです。そんな時、第三イザヤは神さまの栄光の顕現（けんげん）を語るのです。

2節にあるように、今は「闇は地を覆い 暗闇が国々を包んで」いますが（2節）、「あなたの上には主が輝き出て 主の栄光があなたの上に現れる」ときが必ずやってきます（同節）。そしてまわりの敵である国々は神さまに気づき「海からの宝」、「国々の富」（5節）を携えてエルサレムへと「押し寄せ」てきます（6節）。その時、エルサレムは「喜びに輝き…心は晴れやかに」なるのです（5節）。こうしてイスラエルの人々ばかりでなく、周辺の異邦人にも6節の言葉、「神の栄誉が宣べ伝え」られるようになります（6節）。日常生活の中で希望の光を失い、暗闇の中に沈む現代人へに向かってのメッセージとして今日の朗読箇所は読めるでしょう。「主の栄光」が必ず現れるのです。

第二朗読に移りましょう。『エフェソの信徒への手紙』はパウロが書いたものではなく、パウロの教えを受けた別の人物による著作であろうと考えられています。今日の朗読箇所では省かれている4節をフランシスコ会訳で見てみますと、「このことについて、あなた方がそれを読めば、キリストの神秘に関してわたしが洞察していることを知ることができます」（フランシスコ会訳）とあります。恐らく、初代教会ではこの書簡を礼拝のために集った教会のメンバー全員に読み聞かせたと考えられます（コロ4章16節参照）。

パウロは神の内に世の初めから隠されていた「秘められた計画」（神秘）を福音として異邦人に告知させます。その結果、異邦人はキリスト・イエスにおいて「一緒に受け継ぐ者」、「同じ体に属する者」、「同じ約束にあずかる者」（6節）となります。こうして異邦人とユダヤ人との間を隔てる垣根は取り除かれるのです。異邦人はユダヤ人と「一緒に」（6節）新しい在り方へと再創造されていくのです。

福音の箇所は、博士たちが幼子イエスさまを訪ねるお話です。罪から救う方の誕生が、異邦人である占星術の学者たちに「星」を通して告げられました。しかし、「星」は「秘められた計画」（エフェ3章3節）を暗示するに過ぎません。彼らは自分たちが身につけた知識と体験に基づいて、「星」に引き寄せられながら出かけていきます。一度「星」を見失いますが、彼らは今度「神のことば」に出会います（6節）。こうして「神のことば」に支えられて、幼子のもとにたどり着きます。そして彼らは真の「礼拝」をするのです。

まとめ

主の公現のミサの奉納祈願を味わってみましょう。

いのちの源である神よ、教会の供えものを顧みてください。黄金、乳香、もつ薬ではなく、主イエス・キリストご自身をあらわすこの供えものによって、いのちの糧を受けることができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって、アーメン。

わたしはこの祈願が大好きです。占星術の学者たちは高価な贈り物を携えてやって来ました。そして、それを幼子イエスさまにお献げします。しかし、わたしたちには黄金も、乳香も、もつ薬もありません。何もイエスさまへの献げ物をもってはいないのです。

教会のすばらしいところは、イエスさまが献げ物となり、イエスさまがそれを献げてくれると言うことです。イエスさまとは献げ物であると同時に献げる方なのです。ですから、わたしたちは、日々の砕かれたところ、哀しみや喜び、後悔と決意を白いホスチアに託して、献げるのです。何も献げる物がないと小さくなる必

要はありません。イエスさま自身が献げ物となってくださるのです。そのためにイエスさまは十字架にかけられました。

献げられた白いホスチアは、本当にイエスさまの御体となります。この主の御体であるご聖体をいただいて、わたしたち一人ひとりがこの世に対して、生きた献げ物、生きたいけにえとさせていただくのです。教会とは献げて、神である主イエス・キリストと一つにさせていただく場所なのです。

それではまた来週。